

カチ の か て 第 164 号 2020.11

目次

日本語あれこれ(12)

カチニュース(お知らせ)

日本語あれこれ

ほんやくという りろんへん 翻訳十色①<理論編>

まよ ほんやくか
—迷える翻訳家たち—



「翻訳」との出会い

外国語が堪能な方は、こんなお願いをされたことがあるはずです。「これ、ちょっと翻訳してくれない?」。ほんの少し外国語ができたせいで、私も学生時代、翻訳のアルバイトを頼まれ、軽い気持ちで引き受けました。1年ほど続けたのですが、日が経つにつれ、その難しさと責任の大きさを知り、加えて、外国語力のみならず自分の母語力(日本語力)のなさを思い知らされました。

これがきっかけとなり、留学先では言語学や翻訳実践を学び、大学院での研究も翻訳作品を主に扱いました。そして行きついた先は、「翻訳は深い、深すぎる! 私の手に負えるものではない!」という結論でした。以来、翻訳でお金を貰おうなんて考えたことはあり

ません。(学生時代の自分を思うと、怖いもの知らずで恥ずかしくなります…)。

グローバル化が進んだ現在、いろいろな情報が国を越え、言葉を越え行き交っています。翻訳が担う役割もますます大きくなってきました。学術的にも言語学の一分野としてや、翻訳論、実践論、方法論など翻訳に関する様々な分野の研究が生まれました。また、高度な技術を持つプロの翻訳家への関心も高まっています。

今回、私が皆さんにご紹介する翻訳についてのお話は、その中のほんの一部、一選択肢にすぎませんが、今後、映画や小説、マンガ、広告コピーなどの翻訳を目にすることがあったら、翻訳って深いな、面白いな、と思っていただけると幸いです。



翻訳ってなあに？

「翻訳」が何かと問われたら、皆さんはどのように答えますか。その際、「訳す」という言葉を使つてはいけな
いと言われたら…。辞書によると、翻訳とは「ある言語
ひょうげん ぶんしやう ないやう ほか
で表現された文章の内容を他の言語になおすこと」
(『広辞苑』より)だそうです。この文章には口語も含ま
れます。また、英語の辞書には‘To change speech or
writing into another language’ (‘Longman’より)と
せつめい
説明されています。

留学先の大学で翻訳を学んでいたとき、私の先生はこ
う言いました。翻訳とは「原文の内容を別の言語におい
て再生させること。その内容は必ずしも原文の「写し」な
のではなく、同じ価値の情報になるよう、文法や語彙に
ちやうせい くわ うつ
多くの調整を加え、別の言語に「移す」こと」。私が翻訳の
深さを知ることとなった、はじめの一步でした。



言葉が持つ「情報」とは？

先ほど「情報」とありましたが、言葉が持つ情報とは
何でしょう。まずは、もちろん意味です。それ以外にも、
ポライトネス、世代、性別、含意、地域・地方差、硬さ・
やわ かんじやう おんせいできとくちやう
柔らかさ、感情、音声的特徴、年代、ユーモアなど、多く
の情報を含んでいます。言葉はこれらの情報を一気に
とど 届けることができる道具です。それがゆえ、ある言語・
ぶんか ぶんか あいて かい
文化が分からない相手に、翻訳を介して原文と「同じ
価値の情報」を届けようとしたとき、それは原文と同じ
ことた はいけい
長さで事足りるのか、含意や文化的背景を説明しない
とうか とうか つた かつとう
で本当に等価の情報が伝わるのだろうか、という葛藤
が生まれます。

また、原文にはあるけれども移し替える側の言語に

ない情報が存在する場合もあります。例えば、日本語
には役割語というものがあります。言葉を聞けば(読め
ば)どんな人が話しているかある程度想像がつくという
き の う
機能を持つものです。「あたし、ミカ、よろしくね。〈女の
子〉」「ぼく、ショウタ。〈男の子〉」、日本語が分かる人で
あれば、文を読むだけで(声を聞かなくても)、どんな人
物・キャラクターが話しているのか想像ができます。こ
のような日本語の特徴は韓国語にもあるようですが、
じつ は世界の言語から見ると非常に珍しいそうです。

あるいは、原文にも移し替える側の言語にも同じ
ようそ 要素が存在する場合があります。しかし、その要素が全
く同じ場面で、同じ機能で使われているかというそ
うではありません。その代表的な例が日本語と韓国語
の敬語です。どちらの言語にも敬語はありますが、韓国
語は目上の人に対して常に敬語を用いる「絶対敬語」、
日本語は話す相手との関係により尊敬語と謙譲語を
使い分ける「相対敬語」という点において異なります。
例えば、韓国で自分の上司である社長が「いる」ことを
言うときは、社長に対して言う場合も、それ以外の人
に対して言う場合も「社長はいらっしゃいます。」と言
います。一方、日本語では話す相手によって「社長はいら
っしゃいます。」(社長に対して、あるいは同じ会社<ウ
チ>の人に対して)と「社長はおります。」(外部<ソト>
の人に対して)とを使い分けます。一見、共通して見え
る両言語の相違点をきちんと理解し、移し替えた側の
言語にその違いを反映させ不自然さを取り除くこと
ができるか、ここが違和感を与えない翻訳の分岐点に
なります。





これぞ翻訳家の技!

翻訳家は作者の意思、原文の意図を慎重に読み解きながら、ある言語を別の言語に移し替えるという作業を行っています。そのような中、伝えるべき情報に優先順位を付けたり、時には大胆な取捨選択の決断を迫られることもあります。ここでは、翻訳における情報の取捨選択、作品の特徴を活かすための試行錯誤が垣間見られる例をご紹介します。と思います。

映画『マイ・フェア・レディー』をご存知でしょうか。1910年代のロンドンで、ひどく訛った英語を話す少女が、礼儀作法や洗練された英語を身に付けながら大人の女性へと成長していくシンデレラ・ストーリーです。この映画では、主人公の女性が話す英語の訛り、つまり、がさつさ、やぼったさが伝わるよう翻訳が行われました。主人公の女性の英語が美しく変化していく過程も見事、翻訳に反映されています。なぜなら、主人公の話す英語は作品のストーリーを理解するための大切な鍵であり、成長と変化を聴衆に伝えるための象徴だったからです。

これとは逆に、翻訳(英語訳)に方言の要素が取り入れられなかった作品の1つに『この世界の片隅に』という映画があります。この物語は、1940年代の広島を舞台に、戦争という極限の時代を主人公の女性がひたむきに懸命に生きる姿を描いたものです。方言はその土地の風土、そこに暮らす人々の雰囲気伝える大切な要素であることは言うまでもありません。本作品では、登場人物のほぼ全員が全篇、広島方言で会話を繰り広げました。しかし、翻訳の過程で優先順位を決める際、方言の要素を含めないことによって本作の主題の理解が妨げられることはない、と判断されました。そのため、翻訳から方言の要素が取り除かれました。

また、翻訳が最も難しいものとして、音声的特徴(語呂合わせなど)やユーモア(ジョーク、ギャグなど)が挙げられます。その場合、原文の翻訳を諦め、原文の内

容とは全く別に、移し替える側の言語で新しく語呂合わせやジョークを作って翻訳に当てる、という手法がしばしば採られます。その代表的な例が『グッドモーニング・ベトナム』という映画です。ロビン・ウィリアムス演じるラジオDJのまくし立てるジョークが印象的な作品です。この映画は、日本語字幕の監修としてお笑いタレントの小堺一機氏と関根勤氏が携わったことでも有名です。

最後に、私が最も衝撃を受けた翻訳の例をお話します(学生時代の授業での話のため、残念ながら出典は覚えていません…。)日本の文学作品の中に「(主人公は)縁側でしるこをすすった。」という表現がありました。この「しるこ」を英語でどのように訳すか、翻訳家は大変悩んだそうです。「しるこ」をローマ字で‘shiruko’と書いても、しるこが何であるのか当時の西洋人には伝わらない。「小豆を煮た甘いスープ」と長く書き連ねることもできるが、作品の流れを損ねてしまう。では、‘shiruko’と訳しておいて、後ろに注釈をつけるべきか。そして、最終的に生まれた英語翻訳が「テラスでゼリーをたしなんだ」(筆者訳)でした。なぜなら、この一文で原作の作者が伝えたかったことは縁側でしるこを食べたということだけでなく、そのほのぼのとした雰囲気、温かさであると翻訳家は解釈したからです。当時の西洋人が、日本人が縁側でしるこを食べたときのようにほっこりする甘いものは何か、この縁側の雰囲気が伝わる表現は何か、行きついた答えがこの翻訳でした。



おわりに

翻訳家の数だけ翻訳があります。例えば、シェークスピア1つの作品に対し日本語でも複数の翻訳が存在します。解釈の違いにこだわり新たな翻訳を試みる者、多くの人に読んでもらうことを優先し読みやすい言葉で翻訳を行おうとする者、あるいは原文そのものが読み

にくいのだから日本語においてもその読みにくさ(という情報)を含めるべきだという信念で翻訳を行う者、正に、翻訳十色です。それは、それぞれの翻訳家が作品と真剣に向き合い、作者の意図と言葉に込められた情報を精一杯感じ取ろうとした証でもあります。

私たちは今、翻訳を介し未知の言語、未知の文化圏で作られたいろいろな作品(ドラマ、映画、小説、ニュースなど)を気軽に楽しむことができます。もし、この

先、何かしらの翻訳作品に触れる機会があったら、そこに見え隠れする翻訳家たちの試行錯誤や職人技、創意工夫を感じ取ってみてください。

今回は翻訳について翻訳家の視点から特に理論を中心にお話しました。次回、「翻訳十色②<実践編>」では、翻訳の種類や翻訳のテクニックについて、映画字幕の翻訳を中心にお話したいと思います。

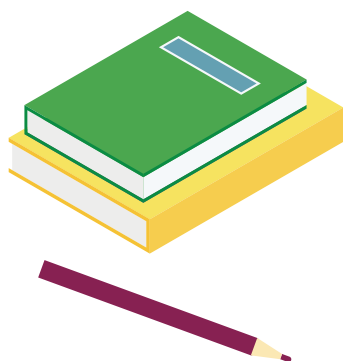
国際交流基金ソウル日本文化センター
日本語教育アドバイザー



信岡 麻理

●●● 参考文献 ●●●

- ナイダ・テイバー・ブラネン著／沢登春仁・升川潔訳(1973)『翻訳—理論と実際—』研究社
- 松村達雄(1978)『翻訳の理論—英語から日本語へ—』玉川大学出版
- 川本皓嗣 井上健 編(1997)『翻訳の方法』東京大学出版会
- 別宮貞徳(1975)『翻訳を学ぶ』八潮出版社
- ロジャー・ファウラー著／豊田昌倫訳(1979)『小説と言語学』紀伊国屋書店
- 國廣哲彌(1981)『翻訳の言語学』『言語』大修館
- 藤井章雄(1996)『ニュース英語の翻訳プロセス—異文化コミュニケーションとしての一考察—』早稲田大学出版
- 小林淳夫(1996)『翻訳の極意—「想像する翻訳」の実際—』南雲堂フェニックス





めいさくろうどく 日本文学名作朗読@YouTube 始めました!

家で過ごす時間の多い今年は、日本文学の名作を「聴いて」みるのはいかがでしょうか。
国際交流基金ソウル日本文化センター文化情報室では、YouTubeチャンネルを通じて
みなさんに日本の名作文学の朗読をお届けします。
宮沢賢治の <銀河鉄道の夜>を韓国語で5分ずつX6回に分けて、聴くことができます。
(韓国語字幕付き)
次のURLをクリックしてご覧ください。

<https://www.youtube.com/channel/UChqem2hjTPFoZW8WnV-q9iQ>

Click

▶ ⏮ 🔊 1:35 / 3:40



えいがさいかいまく 「オンライン日本映画祭開幕」



23作品の多様な日本映画を、韓国語字幕付きで楽しめます。
『アイネクライネナハトムジーク』『横道世之介』といった近年の話題作から、大人から子どもまで楽しめる
アニメ作品、さらには不朽のクラシック映画を代表して、小津安二郎監督作品『お茶漬の味』等、日本
映画の多様性と魅力が詰まったラインナップです。
詳細上映スケジュールは、当センターウェブサイト上で公開しています。

会期 12月4日(金)～13日(日)

場所 日本映画ウェブサイト「JFF Plus」上でストリーミング配信

https://www.jpf.or.kr/index/s3/s3_1.php?wr_id=2286

Click

